参考資料１

令和８年度第２回滋賀県環境審議会水・土壌・大気部会での主な御意見と対応方針

No	該当箇所	委員	御意見	対応方針
1	生態系の保全：ヨシ群落保全	和田委員	ヨシ群落の中でのヤナギ比率の増加は、地盤が安定してきたものであり、植物の遷移の過程での自然な姿と考える。また、渇水による水位の低下もヤナギ化を助長させる要因と考える。抽水植物であるヨシ群落を保全していくために、どういった姿が良いか、方向性を決めて取組を進めていただきたい。	ヨシ群落の保全においては、「地域の特性に応じた維持管理」が重要と考えております。現在、琵琶湖環境科学研究センターで「ヨシ群落の健全性指標」に関する研究を実施しており、そこで得られた知見も踏まえながら、地域の特性に応じた維持管理を推進して参ります。
2	全般	和田委員	ＤＸの活用および推進について、計画に記載した方が良いのではないか。	御指摘を踏まえ、第９期計画の方針の部分に「新たな知見や最新技術を活用しながら、」と追記しました。 ※第９期湖沼計画（答申案）　Ｐ．５
3	調査研究：気候変動による影響把握	丸尾委員	底層の水は移動していると思うが、底層ＤＯを測定する時の深さや頻度はどのように決めているのか。	底層ＤＯの測定水深は、環境省の告示に基づき、湖底から１ｍ直上（１０ｍ以深の地点）または０．５ｍ直上（１０ｍ以浅の地点）としています。調査頻度は、水深約９０ｍの第一湖盆では毎月２回実施し、底層ＤＯが低下する時期は、調査の頻度を上げています。
4	水質の保全：プラスチックごみ対策	藤本委員	マイクロプラの対応について、今後はどのような方針で進めていくのか。例えば琵琶湖から取り除く等は想定しているのか。	琵琶湖に存在するマイクロプラスチックを取り除くことは困難であることから、計画に記載のとおり、河川等でのプラスチックの現存量等の発生源調査を

				行い、その結果を踏まえた効果的なプラスチックごみの発生抑制を図ります。
5	生態系の保全：水草対策の推進	藤本委員	在来水草の刈取りや根こそぎ除去について、定量的な観点で効果検証が必要ではないか。	御指摘の通り、定量的な観点が重要だと考えており、今年度から３年間、琵琶湖博物館・琵琶湖環境科学研究センター・国立環境研究所琵琶湖分室（Ｒ９年度から参加予定）とともに根こそぎ除去の効率・効果に関する共同研究を実施しております。
6		樋口委員	在来水草の繁茂に対して、悪臭の測定は実施しているか。水草除去の効果検証として、除去前後の臭気測定も考えられるのではないか。	定量的な臭気測定は実施しておりません。漂着した水草の状況は、委託事業として実施している沿岸調査で、受託業者が湖岸に赴いて確認しています。 今後、水草が生活環境に与える影響に関する県民の皆様からの御意見も踏まえながら、必要に応じて検討して参ります。
7	シミュレーションモデルによる水質の将来予測	藤本委員	モデルによる計算の時間間隔はどの程度か。	モデルにより異なりますが、基本は 1 時間間隔です。
8		藤本委員	将来予測について、気温の上昇を想定しているとのことだが、雨の降り方などは想定しているのか。	今回は以下の３つの気象条件での将来予測を算出する予定であり、雨の降り方が変化することは想定しておりません。 ・平均的な気象である 2016 年度のデータを用いた予測。 ・近年発生した高温、暖冬である 2023 年度の気象データを用いた予測。 ・2023 年度の気象から、さらに気温を上昇させたデ

				ータを用いた予測。
9		藤本委員	将来予測について、複数のシナリオを用いるとのことだが、水質の予測値に幅を持たせるのか。	近年の気候変動の影響も考慮し、今回は複数のシナリオを用いて水質の予測値の幅を示すことを想定しています。
10		川﨑委員	近年、確認されている豪雨などの影響は将来予測で想定しているのか。	将来予測のベースとなる気象条件（2016 年度および 2023 年度）において発生した降水イベントはそのまま予測に用いられますが、湖沼計画は年間平均の水質を予測しているため、短期間の極端な事象に関する個別の評価は行いません。